

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第25回

名作誕生の舞台裏 江戸時代後期『北越雪譜』出版の顛末から

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

後世から見れば歴史に残る傑作といえども、その誕生をめぐるのは、極めて微妙な条件に左右された場合が少なくない。小さな運命の悪戯で、我々の目に触れずにしまった幻の傑作ととも、その数は枚挙に暇あるまい。雪国の文化的地誌の先駆として評価される鈴木牧之(1770-1842)の『北越雪譜』(初編1835、二編1841)の場合も、例外ではない。残された史料からは、その出版に至る顛末が詳細に読み取れる。名作誕生の舞台裏からは、関与した有名人たちの虚々実々のやり取りや、出版に懸けた地方文化人の執念が浮かび上がる。

鈴木牧之は、現在の新潟県魚沼郡、地元では随一といわれる、裕福な縮商人の家に十代目として生まれた。越後縮は夏場の袷に珍重されたから、縮縮業者の需要も想像に難くない。牧之の勤勉にして筆まめな性格は、子孫に残した『夜職草[よなべぐさ]』にも明らか。整理魔だった牧之の遺品は、現在では平成元年に開館した記念館に保存されている。そこには、親交を結んだ滝澤馬琴や山東京伝・京山兄弟との交友を物語る書簡も残される。

山東京伝・滝澤馬琴との交渉

文政元年(1818)2月30日に滝澤馬琴が牧之に宛てた手紙が残る。牧之が最初に「雪話」出版の件を山東京伝あてに持ち込んで

不首尾になってより、当時すでに16,7年の歳月が流れていたことが知られる。費用の問題からいったんは挫折した計画は、ついで京都の岡田玉山や東都の鈴木芙蓉に持ち込まれたが、ふたりもすでに亡くなり、京伝 その人も文化13(1816)年には病没。師匠筋にあたる京伝を憚って遠慮していた馬琴に再度持ちかけた相談への返答らしい。老戯作者は、こうした経過を丁寧に振り返ったあと、「只今此著述において三つの難儀あり」と切りだす。まず第一に図絵というものが最近は流行らない。第二には大部な出版となってしまうが、売れ行きが悪かった場合には、版元に変な損害を与えかねない。加えて第三に、「此書はあけてもくなくても雪ばかりにては、めさきかはり不申候」。どこを開いても雪の話ばかりでは、あまりに難儀で、読む方がうんざりする、というわけだ。

以上はいわば版元の「難儀」であるが、加えて、と馬琴は代筆を頼まれた自分の不都合を零し始める。これは自慢話をするわけではないのだが、そもそも版本の作者たるもの、ただ書を作るだけではなくて、まず売れるかどうかと用心し、版元に迷惑をかけぬためには何部が捌けねばならぬか、その年の紙の相場まで胸勘定して、はじめてプロの作家といえるのだ。「これをば知らず只作るものは素人作者也」。そうした

候」と予防線を引き、市井の人の姿は浮世絵師に、山水などはそうでない絵師に依頼するほうが实际的だろう、との対案を示す。これと並んで、外題もまだ煮詰まらず、『北越雪中図絵』では最近奮わない「図絵」と見られるし、『北越雪話』では響きが軽すぎるし、『北越奇談』はすでに先年出版された本に先を越されているし、『北越雪中奇観』あたりかとは思いますが、まだ「雪中」の二文字が落ち着かないなどと、苦心している様子を匂わせる。そのうえで「追々拙著へ右之外題を書載せ」て、近刊案内とし、そこに「越後塩沢鈴木牧之考訂といたし申候」という。牧之は校訂者であって、著者はあくまで馬琴、との確認を駄目押しで入れたわけだ。

同年の5月17日づけの書簡には、挿絵を誰に依頼するかとの相談が見える。「江戸にては北斎の外、この画をかかすべきものなし」。北斎よりほかにこんな面倒な雪の絵を描いてくれる絵師などいないのだが、しかしさりながら「彼人はちとむつかしき仁故、久しく敬して遠ざけ其後は何もたのみ不申」。『椿説弓張月』では途中喧嘩はしながらも、なんとか最後まで挿絵を入れてもらった経験のある作家ならではの述懐。「画料も高料故、板元もよろこび申まじく

7月晦には三度馬琴より来書。山東京伝の弟の京山が、「雪本」の出版に色気をだしたのを聞き付けて（あるいは牧之よりの書状で知らされて）、馬琴は一方で京山側の家族スキャダルに言及し、牧之を牽制する。京伝後室が精神疾患篤いところで、京山が兄の母屋に乗り込み、まもなく後室が没したとの醜聞を伝える馬琴は、京山子は「年来懇意に候へども、兄貴とは少し気質



あいだ102-30

もちがひ」,「彼仁は世才にもたけ候て、当座をよくして人を歎せ候仁」だから、「雪話の著述」のことも、まさかとは思うが、貴兄にちょっとお愛想をいって、色よい返事をしてみせぬとも限らない。まずはご用心をと、あえて腹藏なく申し上げるが、もちろん本件は他言無用にさせていただきたい、など馬琴はあけすけな忠告に及んでいる。その反面、自分の仕事の遅延は棚に上げ、「おのれ一人おもしろがりては売物にならず」と、本の出版など素人にすぎぬ、田舎者の牧之にお説教を始める。「世上の人の嬉しがるを第一にせねば、書肆に損あり」、このことをわきまえずして素人が作った本など、はやったとしても、所詮は「まぐれあたり也」。客商売に徹したプロ根性の心構えが大切で、十分のうち七は俗、三に雅という塩梅が肝要などと、訳知りの編集術を開陳する傍ら、雪に因んだ古歌など宜しく集めおいて提供してくれるように、との助力要請も忘れない。「鈴木牧之考訂」と明記した『越後雪譜』が「全六巻近刻」との予告も『玄同放言』に掲載予定、と依頼主を安心させる配慮も周到だ。

世間一般はご存じでない、校正・校合の苦勞

つづく馬琴よりの第四信。同年10月28日づけの牧之よりの書簡への返信で、11月7日付。冒頭まじかに、いきなり「亡友」山東京伝が『骨董集』の著述を志しながら、終に日の目を見ぬままに世を去った逸話が語られる。「彼人全く骨董集と討ち死にせしといふ也」。京伝がこの書物の成就に奔走苦心しすぎ、性急のあまりかえって策が破れた、との見解を牧之に納得させるのが、どうやら馬琴の目論みだったらしい。ついで突然『雪譜』に話題を振った馬琴は、牧之が出版の準備を「ゆるゆると御集め下され候」ようにと、「奉祈」して見せる。体裁こそ、急いては事をし損じるという教訓を牧之に垂れた格好だが、馬琴自身が『雪譜』の件で、京伝に匹敵しうる呻吟を余儀なくされている窮状を訴えたい、という下

心も見え隠れする。実際、続く紙面で頃合いを見計らうや、馬琴は書物作りの苦心を長々と開陳し始める。

「すべて板本にあやまり多きは、筆耕にあやまれ、又板木師にほりくづされ、校合終に行届不申及出版候故也」。素人はそんな苦勞はご存じないだろうけれど、初校で版木の間違えを朱書しても、十に三つ四つは再校で直っていない。再校で七つのうち五つほどが直ったかと思うと、その間版木を彫刻師のところに再三運び込むために、新たに版木が欠けてやり直が増えるはめになる。そんな調子だから、やっと本が売り出しという頃には、もうすっかり飽き飽きして「振り向きて見るも嫌になり申候」校正の苦しみというのは、そんなわけで新稿を書き下ろすのよりはるかに「骨折れ」なのだが、「見物は一向知らぬこと也」。一般論の装いながら、これはほかならぬ鈴木牧之への当てつけだろう。他人の著作に校正ミスを見つけるのは簡単だが、自分の本では見つからない。これまた牧之殿はおそらくは「ご存じあるまじく哉と存候」。だが「只今よりこの校合が頭痛」であって、なにしろ「未熟の仁には、決してたのまれず」、近年は倅に見習わせてはみたが、思うようには行かぬもの。馬琴の不平不満は延々と続く。これが言い訳だったのか否か不明だが、果たして校正作業は頓挫に畢わる。

山東京山・京水親子との交渉

その後12年余りを経た文政12(1829)年、山東京山からの来信で、出版計画はようやく次の局面を迎える。越後地震から4か月の後、己丑の大火を馬琴は辛くも逃れている。4月20日付けの京山からの来信では、題名はなお『北越雪談』や『越後国雪物語』と定まらないが、秋月庵牧之作、山東京山校合とすることで、大筋はまとまっている。牧之の自作となれば、馬琴としてもあえて口を挟むいわれもあるまいといった配慮も、12月12日の手紙で京山は見せている。翌年4月20日には、享保の改革以来、国禁の記述がないか、和文のものは地本問屋經由で

検査があり、漢文のところは書林仲間より行事一覧を願ひ出るといった手筈が必要であったことも、京山はこと細かに記して、牧之の理解を得ようと努めている。

さらに2年を経た天保3年4月10日の書簡。牧之よりの来信をただちに拝見した旨の言に続き、雪話の草稿をさっそく拝見したが、いくつか問題があるとして、まず越後の方言では江戸では通じず「読んで分からぬはおもしろからぬはじまりなり」。次に「せつかくめづらしき雪話といふ珍味を、ふあんばいにして食べさせ候では、一椀を喫していま一杯とは申すまじく」、文章や話題をうまく塩梅しないと、せつかく御馳走でも読者は食いつかないからご注意を、という忠告。最後に、挿絵の種本の設計にかかわる注意が、事細かに記される。図版を多用したいのは人情だが、とにかく図の版刻には費用がかかる。寸法なども、最初から罫の内径に合う大きさで種本を作っておかなくては、縮尺を変えて複写を作らねばならず、事がうまく運ばない—等等京山は不慣れな牧之に手取り足取りの指図を与えている。

さらに2年後。天保五年仲秋18日の牧之の書簡への12月16/7日づけの返事。懸案の図版を、結局は京山の息子、京水に担当させることで同意を取り付け、雪の話ばかりでは単調だから変化をつけることが肝心だ、と説得する。「汁も平らも肴ばかりでは献立にならず、精進もの聊か交ぜるのが馳走なり。雪によせて余事のはなしも書き加へ、見ておもしろきやうにするが作者の術なり」、と馬琴を復唱。雪のなかで谷に落ちて熊に助けられた、といった逸話は、もっと敷衍してみようとの心参だ、などとも書き添える一方、どこが暖国と違うのかをきちんと書く必要を説き、「雪につけての珍説奇談」をなお原著者に所望している。

地獄の沙汰も——お代のほど

さて最後に大切なのは、代金の算段だった。「すべて藝を売る者は、金とひきかえでなければいやがり申し候。是慾にはあら

ず天下普通の大道なり。ただ書かせるを上方には青田と申候。みのらざると云ふ事なり。江戸にてはざると申候。是はぬけると云ふ事なり」。青田や策では仕事に魂が籠もらず、こうしたやつつけ仕事には、東都の文人は「毎度迷惑いたし候」と京山は、お江戸の気風を説明する。これは全部で5両の作料を請求するための口上だった。どんな返事がくるのかと「肺肝を洗ひ申上候所、お叱りもなく」、支払いのあったことを翌年の正月26日の礼状にしたためている。5両とはどの程度の額だったのか。金子務氏の概算に従うことにするが、一両で米4俵が普通の相場だったという。内訳、金200疋を京水の画代に回しているが、これは江戸表の雑役一日に銀3匁受け取り勘定で、十日の労働量に匹敵すると、京山は説明する。これが妥当するなら、銀30匁が金200疋。五両がざっと20,000文≒2,000疋に相当するから、これはざっと雑役百日分の労賃ということになるうか。また馬琴へは、お年玉の名目で金2朱(1/8両)が支払われている。ちなみに天保8年秋に版行なつたと推定される『北越雪譜』初編三巻の値段は13匁5分。初刷り450部のうち、牧之は50部を自ら買い入れている。その値段、今日の自費出版とくらべて、はたして妥当するだろうか。

『雪譜』第二編の売り出しが始まった天保12年は、馬琴の『南総里見八犬伝』が構想28年にしてようやく完結した年でもあったが、当時すでに中風を病んでいた牧之は、翌天保13年、数え73歳にしてこの世を去ることとなる。江戸時代を通じて、個別の出版にかかわる経緯がここまで詳細に知られる事例は、専門家に伺ったところ、他にはないそうである。

*引用は新潟県教育委員会編『鈴木牧之資料集』(昭和36年)より。漢字を若干補った。また金子務「鈴木牧之」(『歴史読本』2004年4月号)ほか、同氏による国際日本文化研究センターでの研究発表「雪文化地誌の成立」(本年6月19日)に大変啓発された。記して謝意を表します。